

神の「存在論的証明」に対する トマス・アクィナスの批判について

——アンセルムスの論証との比較という観点からの考察——

芝元航平

周知のように、トマス・アクィナスは『神学大全』第1部第2問題第1項で、アンセルムスの『プロスロギオン』における神の存在証明を批判しているとして一般に理解されている。さらにそれは、カントによる批判と同様に、思考・概念のレベルと存在のレベルの混同に対する批判である、という評価も広く行われている¹⁾。しかし、同所でトマスはアンセルムスの名を挙げて批判を行っているわけではない。

本稿の目的は、いわゆる神の「存在論的証明」に対するトマス・アクィナスの批判が、何に対する批判なのかを明らかにすることである。その際、重要なことは、トマスが批判している証明の内容が、はたして『プロスロギオン』におけるアンセルムス自身の論証と同じものであると見なすことができるのか、あるいは、もし異なる点があるとすれば、それはどのような点なのかを明確にすることであろう²⁾。したがって本稿では、まずトマスが「存在論的証明」に言及していると考えられるテキストを分析し、次にアンセルムスおよび彼を批判したガウニロのテキスト³⁾を分析するという仕方で議論を進めたい。

1) たとえばジルソンは、「第四の道」について論じた箇所を、*“But is this not to pass, with Anselm, from thought to being, from the order of knowledge to the order of reality? Now, nothing is less Thomistic than this attitude.”*と述べている。Cf. Etienne Gilson, *Thomism: The philosophy of Thomas Aquinas*, tr. L. K. Shock, A. Maurer, Toronto, 2002, p. 69.

2) そのような検討を行っている先行研究には、Ian Logan, *Reading Anselm's Proslogion: The History of Anselm's Argument and its Significance Today*, Farnham, 2009, pp. 137-143がある。同所でローガンは、トマスにおけるアンセルムスの論証の理解を各テキストに基づいて詳細に分析しているが、彼は一貫して、トマスがアンセルムスの論証を批判したという前提で論じており、アンセルムスの立場からトマスへの反論を行っている。

3) アンセルムスとガウニロのテキストとしてはシュミット校訂版を用いる。

1. トマスが「存在論的証明」に言及しているテキストの分析

トマスが「存在論的証明」に言及しているテキストとしては、『命題集注解』（1252-56年）第1巻第3区分第1問題第2項、『真理論』（1256-59年）第10問題第12項、『ボエティウス三位一体論注解』（1258-59年）第1部第1問題第3項、『対異教徒大全』（1259-64年）第1巻第10-11章、『神学大全』第1部（1266-68年）第2問題第1項、『詩編注解』（1272-73年）第13番および第52番⁴⁾を挙げることができる⁵⁾。

これらのテキストでは、聖書注解である『詩編注解』を除けば、一貫して「神が存在することはそれ自体によって知られること（per se notum）であるか」という自明性への問いのもとにこの証明が論じられている⁶⁾。そして、トマスはこの問題を、「それ自体における」（in se）自明性と、「われわれのもとでの」（quoad nos）自明性という、二つの自明性の概念を区別することによって解決しようとしている。

これらのテキストのうち、アンセルムスの名を挙げているのは、初期の『命題集注解』、『真理論』、『ボエティウス三位一体論注解』、および最晩年の『詩編注解』のテキストである。これらのテキストでは、トマス自身の解答においてもアンセルムスに対する批判の言葉は見られない。一方、いわゆる「存在論的証明」に対する批判が明確に述べられている『対異教徒大全』および『神学大全』のテキストにはアンセルムスの名は挙げられていない。そこで、本節ではトマスのアンセルムス自身の主張に対する理解を解明するために、まずアンセルムスの名が挙げられている諸テキストの内容を分析し、次いで、アンセルムスの名が挙げられていない『対異教徒大全』および『神学大全』のテキストの内容を分析することとしたい。

4) ウルガタ版での番号である。現行の聖書では第14番および第53番である。

5) Cf. Logan, *op. cit.*, p. 138. ローガンは『能力論』第7問題第2項も（*Quaestiones Disputatae De potestate* という書名で）該当箇所として挙げているが、同項では第11異論および同異論解答において神の存在の自明性が論じられているもののアンセルムスの論証に相当するものは語られていないように思われる。なお、著作年代については James A. Weisheipl, *Friar Thomas d'Aquino: His Life, Thought and Works*, New York, 1974 を参照。

6) ただし、『ボエティウス三位一体論注解』のテキストの表題は、「神は精神によって認識される最初のものであるか」である。しかし、アンセルムスに言及されている第6異論および同異論解答に限れば、この問題が自明性との関連で論じられていると言える。

(1) アンセルムスの名が挙げられているテキストの分析

(a) 『命題集注解』第1巻第3区分第1問題第2項では、その第4異論において、「存在しないとは考えられえないもの」が「存在しないと考えられうるもの」よりも大きなものであるという論拠に基づく、『プロスロギオン』第3章に由来する論拠⁷⁾が挙げられている。

さらに、存在しないことが考えられえないものは、自体的に知られるものである。しかるに、神は、存在しないとは考えられえないものである。それゆえ、〔神〕自身が存在することは、自体的に知られることである。中間命題の証明は、アンセルムスの『プロスロギオン』による。すなわち以下の通り。神はそれよりも大きなものが考えられえないものである。しかるに、存在しないとは考えられえないものは、存在しないと考えられうるものよりも、より大きなものである。それゆえ、神が存在しないことは考えられえない⁸⁾。

この異論に対するトマスの解答は次の通りである。

アンセルムスの論拠は、次のように知解されるべきである。われわれが神を知解する後には、「神が存在し、かつ〔神が〕存在しないことが考えられうる」ということは知解されえない。しかし、このことから、或る者が〔神が存在することを〕否定するという、あるいは、神が存在しないとは考えることができないということが帰結するわけではない。というのも、それよりも大きなものが考えられえないこのようなものが何も存在しないと考えることができるからである。それゆえ、〔アンセルムス〕自身の論拠は、それよりも大きなものが

7) アンセルムス自身は『プロスロギオン』の序文で「一つの論拠」(unum argumentum)と語っており、同書の第2章と第3章で別々の論拠があるとみなすことは適切ではない。しかし、トマスが挙げているそれぞれの異論における論拠という意味では、同書の第2章に由来する論拠と第3章に由来する論拠を区別することは許されるであろう。

8) "Praeterea, illud est per se notum quod non potest cogitari non esse. Sed Deus non potest cogitari non esse. Ergo ipsum esse per se est notum. Probatio mediae est per Anselmum, *Proslóg.*, cap. XV, col. 235, t. I; Deus est quo majus cogitari non potest. Sed illud quod non potest cogitari non esse, est majus eo quod potest cogitari non esse. Ergo Deus non potest cogitari non esse." : *In I Sent.*, d. 3, q. 1, a. 2, arg. 4 (Mandonnet). なお、マンドネ校訂版は『プロスロギオン』の箇所を第15章としているが、第3章とするのが適切であろう。

考えられえない或るものが存在することが前提されている、という前提から出て来るのである⁹⁾。(傍点筆者)

トマスは、アンセルムスを批判するのではなく、異論がアンセルムスの意図を誤解していると主張している。トマスの理解では、アンセルムスの論証は、われわれが、「それよりも大きなものが考えられえない或るもの」としての神が存在することを知解した後では、そのようなものとしての神が存在しないということを考えることができないことを示すものである。したがって、トマスは、アンセルムスの論証が、神の存在を前提とせず論証を行う、いわゆる「神の存在証明」であるとは考えていないことになる。また、このようなトマスの論述からは、アンセルムスの論証は論理的に妥当性を持つとトマスが理解していることが読み取れるであろう。

トマスの議論の特徴は、論証の結論が真であると認識するのは誰であるのか、という認識者の観点から論じているということである。「それよりも大きなものが考えられえないもの」が「存在する」と認識している者のみが、この論証の結論、すなわち「それが存在しないとは考えられえない」ことが真であると認識しうるのである。

ところで、このテキストでトマスは、「それよりも大きなものが考えられえないもの」が「存在しないと考えることができる」と明示的に述べているが、この点に関してはアンセルムスの主張との整合性が問題となるであろう。トマスは第1 反対異論で、「愚か者は自らの心の中で、神は存在しないと語った」という「詩編」第13(14) 番および第52(53) 番の聖句¹⁰⁾に基づいて、神が存在することは自体的に知られることではないという主張を挙げている¹¹⁾。しかし、この反対異論に対してトマスは特に解答を与

9) “Ad quantum dicendum, quod ratio Anselmi ita intelligenda est. Postquam intelligimus Deum, non potest intelligi quod sit Deus, et possit cogitari non esse; sed tamen ex hoc non sequitur quod aliquis non possit negare vel cogitare, Deum non esse; potest enim cogitare nihil hujusmodi esse quo majus cogitari non possit; et ideo ratio sua procedit ex hac suppositione, quod supponatur aliquid esse quo majus cogitari non potest.”: *In I Sent.*, d. 3, q. 1, a. 2, ad 4.

10) アンセルムスも『プロスロギオン』第2章で、自らの考察の出発点としてこの聖句を引用している。

11) “Contra, ea quae per se sunt nota, ut dicit Philosophus, IV *Metaph.*, text. 28, etsi exterius negentur ore, nunquam interius negari possunt corde. Sed Deum esse, potest negari corde, ps. XIII, 1: *Dixit insipiens in corde suo: Non est Deus.* Ergo Deum esse non est per se notum.”: *In I Sent.*, d. 3, q. 1, a. 2, s. c. 1.

えておらず、『命題集注解』でのトマス自身の立場は明確ではないように思われる。

(b) 次に、『真理論』第10問題第12項では、その第2異論で、『プロスロギオン』の第3章に由来する論拠が、アンセルムスを名指しして挙げられている。トマスはその異論解答において、われわれが神は存在しないと考えることができるということは、われわれの知の欠陥に由来すると述べている。

ところで、『真理論』のテキストで注目できることは、トマスが主文でアンセルムスが内的に考える二つの仕方を区別していると指摘していることである。神が存在しないとわれわれが考えることができないのは、言葉についての内的な思考ではなく、あくまで事柄自体についての内的な思考においてのみである。この区別は『プロスロギオン』第4章の内容に沿ったものである。

しかるに、他の人々は、アンセルムスのように、神が存在することは、いかなる者も神は存在しないと内的に考えることができないというほどに、自体的に知られることであると考えている。もっとも、このことを外的に公言することはできるし、それによって公言する言葉を内的に考えることができるのではあるけれども¹²⁾。

トマスは、このアンセルムスの主張に対して特に反論を行っていない。また、トマスは、先述の「詩編」第13(14)番および第52(53)番の聖句を論拠とした反対異論に対する反対異論解答においても、アンセルムスが二つの思考の仕方を区別していたことを指摘している。

アンセルムスは『プロスロギオン』において次のように説明している。愚か者が心の中で、神は存在しないと語ったことが知解されるのは、これらの言葉を考えたという限りにおいてであって、このことを内的な理性によって考えることができたからではない¹³⁾。

12) "alii vero, ut Anselmus, opinantur quod Deum esse sit per se notum in tantum quod nullus possit cogitare interius Deum non esse, quamvis hoc possit exterius proferre et verba quibus profert interius cogitare.": *De ver.*, q. 10, a. 12, c. (Leonina).

13) "Anselmus in Proslogion ita exponit quod insipiens intelligatur dixisse in corde 'non est Deus', in quantum haec verba cogitavit, non quod hoc interiori ratione cogitare

これらのトマスの論述は、アンセルムスの二つの思考の区別を自らの主張と整合的であるものとして積極的に認めていることを示していると言えるであろう。その意味で、『命題集注解』よりも綿密な考察がなされているように思われる¹⁴⁾。

(c) 次に、『ボエティウス三位一体論注解』第1部第1問題第3項では、その第6異論で、神は存在しないとは考えられえないものであるという、『プロスロギオン』第3章に由来する主張がアンセルムスを名指しして挙げられている。

この異論に対してトマスは次のように解答している。

神が存在することは、それ自体における限りでは、自体的に知られることである。なぜなら、神の本質は自らの存在だからである。そして、この仕方アンセルムスは語っているのである。しかし、われわれにとってはそうではない。なぜなら、われわれは神の本質を見ているわけではないからである¹⁵⁾。

ここでトマスは、アンセルムスの主張をトマス自身の「それ自体において」と「われわれのもとで」という区別に引きつけて、前者の仕方における認識として解釈している。この解釈は、これまでのトマスの解釈と異なるものというよりは、『真理論』における二つの思考の仕方の区別をふまえた解釈を簡潔にトマス自身の用語で述べたものであると言うべきであろう¹⁶⁾。

potuerit.”: *De ver.*, q. 10, a. 12, ad s. c. 1.

14) なお、先述の『命題集注解』第1巻第3区分第1問題第2項第1反対異論では、アリストテレスに依拠して、「口によって外的に否定されること」と「心によって内的に否定されること」というアンセルムスに類似した区別が述べられている。しかし、同所では、後者の否定の仕方が、「愚か者」が心の中で「神は存在しない」と語る仕方と同一視されており、少なくともその適用においてはアンセルムスとは異なる理解がなされていると言うべきであろう。

15) “Deum esse quantum est in se est per se notum, quia sua essentia est suum esse – et hoc modo loquitur Anselmus –, non autem nobis, quia eius essentiam non uidemus.”: *In De trin.*, q. 1, a. 3, ad 6 (Leonina).

16) アンセルムスは、『プロスロギオン』第4章で、“Aliter enim cogitatur re, cum vox eam significans cogitatur, aliter cum id ipsum quod res est intelligitur. Illo itaque modo potest cogitari Deus non esse, isto vero minime.” (p. 103) と述べており、後者の「その事物がそれであるものそのものが知解される」という仕方を、トマスのように「それ自体において」知解されることとして解釈することは可能であると思われる。

(d) 最後に、トマス晩年の著作である『詩編注解』の第13(14)番および第52(53)番では、いかなる者も神が存在しないと考えることはできないという主張が、アンセルムスを名指しして挙げられている。そのどちらのテキストにおいてもトマスは、「それ自体に従って・それ自体によって」(secundum se; propter se) と、「われわれのもので・われわれによって」(quoad nos; propter nos) という二つの観点を区別して、アンセルムスの主張を前者の観点によるものとして解釈し、神の存在は神の实体・本質であるという論拠に基づいてその主張を承認している。したがって、トマスは晩年においても、『ボエティウス三位一体論注解』と同様の理解を維持していると言えるであろう。

(2) アンセルムスの名が挙げられていないテキストの分析

(a) まず、『対異教徒大全』第1巻では、その第10章で、「知性においても事物においても存在するもの」は「知性のみにおいて存在するもの」よりも大きなものであるという論拠に基づく、『プロスロギオン』第2章に由来する論拠が、同第3章に由来する論拠とともに挙げられている¹⁷⁾。前者については、次のように述べられている。

その名辞が知られると直ちに認識される事柄が、自体的に知られることと言われる。……しかるに、「神が存在する」とわれわれが言うことは、そのようなことである。……しかし、[それよりも大きいものが考えられえない或るものが]ただ知性のうちのみが存在しているということはありえない。というのも、知性においても事物においても存在しているものは、ただ知性において存在しているものよりも大きいからである。しかるに、その名称の意味内容そのものが、神よりも大きなものは何も存在しないということを示している。それゆえ、名称の意味表示そのものに基づいて明らかなものとして、自体的に知られるものであるということが結果する¹⁸⁾。(傍点筆者)

17) 『プロスロギオン』第3章に由来する論拠に対して、第11章でトマスは、神が存在しないと考えられうるのはわれわれの知性の無力さによると解答している。これは、『真理論』や『ボエティウス三位一体論注解』と同様の解釈であると言えるであろう。

18) "Illa enim per se esse nota dicuntur quae statim notis terminis cognoscuntur: ... Huiusmodi autem est hoc quod dicimus *Deum esse*. ... Nec potest in intellectu solum esse: nam quod in intellectu et re est, maius est eo quod in solo intellectu est; Deo autem nihil esse maius ipsa nominis ratio demonstrat. Unde restat quod Deum esse per se notum est, quasi

このテキストにおいては、異論の論拠が名称の「意味表示」(significatio)に基づく論証として提示されているという点が注意されるべきであろう。つまり、「それよりも大きなものが考えられえない或るもの」という名称の意味表示そのものの分析から、それが事物においても存在することが「直ちに」(statim) 導出されるということになる。

また、「知性においても事物においても存在しているものは、ただ知性において存在しているものよりも大きい」という論拠は、一般的な命題として述べられており、それを神の名称の意味に当てはめるという仕方でも論証がなされている。しかし、この命題の表現は、認識者の視点からではなく、第三者的な立場から述べられているために、大小関係が同じ同一のものについて語られているのか、異なる二つのものについて語られているのかという点に関して、曖昧であるように思われる。

この論証に対する第 11 章でのトマスの解答は以下の通りである。

しかるに、神というこの名称によって公言されているものが精神によって把握されているということからは、知性においてでなければ、神が存在するということは帰結しない。……そして、このことから、それよりも大きなものが考えられえない或るものが諸事物の本性において存在するということは帰結しない。そして、そのようにして、神が存在しないと主張する者たちにとっても不都合なことは何も起こらない。というのも、事物においてであれ、知性においてであれ、いかなるものが与えられても、より大きな或るものが考えられうるということは不都合なことではないからである。それは、それよりも大きなものが考えられえない或るものが諸事物の本性において存在すると認めている者にとってでない限りにおいてである¹⁹⁾。

この解答でトマスは、異論で述べられていた「知性においても事物においても存在しているものは、ただ知性において存在しているものよりも大

ex ipsa significatione nominis manifestum.”: S. c. G. I, cap. 10, 60 (Marietti).

19) “Ex hoc autem quod mente concipitur quod profertur hoc nomine *Deus*, non sequitur Deum esse nisi in intellectu. ... Et ex hoc non sequitur quod sit aliquid in rerum natura quo maius cogitari non possit. Et sic nihil inconueniens accidit ponentibus Deum non esse: non enim inconueniens est quolibet dato vel in re vel in intellectu aliquid maius cogitari posse, nisi ei qui concedit esse aliquid quo maius cogitari non possit in rerum natura.”: S. c. G. I, cap. 11, 67.

きい」という論拠が誤りであると主張しているわけではない。あくまでトマスは、認識者にとって「事物において存在する」と認識されているのか否かということの問題としているのである。

トマスは、神が存在しないと考える者にも何ら不都合なことが生じないと明示的に述べているが、その論拠は、「いかなるものが与えられても、より大きな或るものが考えられうるということは不都合なことではない」ということである。このことは、神の名称の意味内容を理解したものが、「事物においても存在するもの」の方がより大きいという主張を認めているとしても、もしより大きいものの系列が無限に続くと考えているのであれば、その者が「それよりも大きなものが考えられえないもの」が事物においては存在しないと考えることは可能であるという理解を示していると言えるであろう。

(b) 次に、『神学大全』第1部第2問題第1項では、その第2異論において、『プロスロギオン』第2章に由来する論拠のみが挙げられている。この異論では、「直ちに」(statim)という語が四回用いられ、『対異教徒大全』の場合よりも、神が存在することが「直ちに」知られる自明なことであることが強調されている。さらに、神の名称の意味内容が「それよりも大きなものが意味表示されえないもの²⁰⁾」(傍点筆者)と述べられ、アンセルムスによる表現が改変されており、名称の意味表示に基づく論証であることがより明確にされている。

この異論に対するトマスの解答は、神の名称の意味内容を理解することから直ちにそれが事物において存在することが帰結するのではないという点では、『対異教徒大全』での解答と同じである。神の名称の意味内容も、異論解答では、「それよりも大きいものが考えられえないもの」に戻されている。その一方で、「その名称によって意味表示されているものが諸事物の本性においても存在していることを知解していることが帰結することはない²¹⁾」(傍点筆者)と述べられており、知解する認識者にとっての問題であるということが、『対異教徒大全』のテキストよりも明示的に述べられていると言えるであろう。

ところで、この異論解答では、「それよりも大きなものが考えられえな

20) “id quo maius significari non potest”: S. T. I, q. 2, a. 1, arg. 2 (Marietti).

21) “non tamen propter hoc sequitur quod intelligat id quod significatur per nomen, esse in rerum natura”: S. T. I, q. 2, a. 1, ad 2.

い或るものが事物において存在していることが前提されているというのでなければ、〔それが〕事物において存在することは論証されえないのであるが、このことは神が存在しないと主張する者によっては前提されていない²²⁾と述べられている。トマスのこの論述は必ずしも明瞭であるとはいえない難いが、これが単なる同語反復ではないとするならば、認識者によって「それよりも大きなものが考えられえない或るものが事物において存在していること」が前提されることは、当の議論が論証として成立するための必要条件であるという意味で解釈することが可能であるように思われる。その限りでは、『対異教徒大全』の場合と同様に、『神学大全』においてもトマスは、「事物においても知性においても存在するもの」の方がより大きいという論拠をそれ自体として批判しているわけではないと言えるであろう。

2. アンセルムスおよびガウニロのテキストとの比較

以上で見たようなトマスの存在論的証明に対する議論は、アンセルムス自身のテキストと比較してみたとき、妥当性を持つと言えるであろうか。アンセルムスは『プロスロギオン』第2章で次のように述べている。

それゆえ、愚か者でさえ、それよりも大きなものが何も考えられえない或るものが知性のうちに存在することを、納得している。なぜなら、これを彼が聞くとときには、彼はそれを知解し、そして、知解されたいかなるものも知性のうちに存在しているからである。そして、確かに、それよりも大きなものが考えられえないものが、ただ知性のうちにのみ存在しているということはある。というのも、もし知性のうちに存在しているのであれば、事物においても存在することが考えられうるが、そのものはより大きいからである²³⁾。(傍点筆者)

このテキストにおいてはまず、「直ちに」知られているという意味での

22) "Nec potest argui quod sit in re, nisi daretur quod sit in re aliquid quo maius cogitari non potest: quod non est datum a ponentibus Deum non esse.": ibid.

23) "Convincitur ergo etiam insipiens esse vel in intellectu aliquid quo nihil maius cogitari potest, quia hoc, cum audit, intelligit, et quidquid intelligitur, in intellectu est. Et certe id quo maius cogitari nequit, non potest esse in solo intellectu. Si enim vel in solo intellectu est, potest cogitari esse et in re; quod maius est.": *Proslogion*, cap. 2, p. 101.

自明性は問題とされていないことが注目されるべきであろう。また、アンセルムスは、「それよりも大きなものが何も考えられえない或るもの」が知性のうちにのみ存在しているのではないことの理由として、「というのも、もし知性のうちに存在するのであれば、事物においても存在することが考えられうるが、そのものはより大きいからである」と述べている。ここでアンセルムスは、同一のものについて、それが事物においても存在すると考えられた場合の方がより大きいものとして考えられていると理解していると言えるであろう²⁴⁾。したがって、アンセルムス自身の論証においては、「それよりも大きなものが何も考えられえない或るもの」が「事物においても存在することが考えられうる」という存在の思考の可能性が論証の前提として不可欠な役割を演じているということになる²⁵⁾。

ところで、この論証の中で、「それよりも大きなものが何も考えられえない或るもの」が「知性のうちに存在する」ということは、愚か者自身も納得していることであると明示的に述べられている。すなわち、このことは信仰のない愚か者であっても理性によって理解するということである。その一方で、「事物においても存在することが考えられうる」ということは端的に事実として与えられている²⁶⁾。しかし、『プロスロギオン』のテキストの論述からは、「知性のうちに存在する」ことを納得している「愚か者」が、「事物においても存在することが考えられうる」という可能性も認めているということは少なくとも明示的には語られていない。したがって、アンセルムス自身は、誰にとっても「直ちに」事物においても存在すると認められるという意味での自明性を主張しているのではないと言えるであろう²⁷⁾。

アンセルムス自身にとっては、「事物においても存在することが考えられうる」という前提は信仰によって与えられているように思われる。アン

24) 今道友信は、「アンセルムスが言おうとしたことは、それゆえ観念とそれの実現された事象との比較なのであって、決して『何であれ事象の中にあるところのもの』がその事物性のゆえに、それと本質的関係のない観念よりもより大きいなどと言っているのではない」と述べている（『中世の哲学』岩波書店、2010年、235頁）。

25) Cf. Logan, *op. cit.*, p. 142. なおアンセルムスは、『プロスロギオン』第3章でも、「存在しないとは考えられえない或るものが存在することは考えられうる」“Nam potest cogitari esse aliquid, quod non possit cogitari non esse” (p. 102) と明示的に述べている。

26) Cf. Jasper Hopkins, “Anselm’s Debate with Gaunilo”, *Analecta Anselmiana*, Band V, Frankfurt, 1976, p. 49.

27) ローガンも “Anselm would agree with Aquinas that God is not *per se notum* in relation to us” と述べている。Cf. Logan, *op. cit.*, p. 142.

セルムスは『プロスロギオン』第1章で、「というのも、私は、『信じていないならば、知解しないだろう』というこのことも信じているからです²⁸⁾」と述べた上で、続く第2章の冒頭で次のように述べている。

それゆえ、信仰に知解を与える主よ、私たちが信じているようにあなたが存在し、あなたが私たちが信じているものであることを、あなたが有益であると知るだけ私が知解することをお許してください。そして確かに、私たちは、あなたが、それよりも大きなものが何も考えられない或るものであることを信じています²⁹⁾。

このテキストでは、神の名称の意味内容だけではなく、「あなた(=神)が存在する」ことも信じている内容として明言されている。したがって、アンセルムスは、神が存在すると信じることも知解のための前提条件であると考えていると言えるであろう³⁰⁾。

このようなアンセルムスの論証の進め方は、信仰を前提とせずに、万人が認める感覚的な経験から出発して第一原因としての神の存在を説得的に論証しようとするトマスの「五つの道」の論証とはその意図が異なっている。したがって、アンセルムスの論証はトマス自身の意味での「神の存在証明」ではないというトマスの理解は、アンセルムス解釈としても妥当性を持つように思われる³¹⁾。

次に、ガウニロのテキストを検討すると、ガウニロはアンセルムスへの反論の冒頭で、アンセルムスの論証の内容を提示しているのであるが、ここではアンセルムスのテキストに見られた存在の思考の可能性ということが欠落している。

28) “Nam et hoc credo: quia »nisi credidero, non intelligam«.”: *Proslogion*, cap. 1, p. 100.

29) “Ergo Domine, qui das fidei intellectum, da mihi, ut, quantum scis expedire, intelligam, quia es sicut credimus, et hoc es quod credimus. Et quidem credimus te esse aliquid quo nihil maius cogitari possit.”: *Proslogion*, cap. 2, p. 101.

30) 名称の意味内容の知解に関する、論証の前提としての信仰の役割の不可欠性については、小野忠信『アンセルムスの神学』新教出版社、1985年、76頁を参照。

31) 古田暁はアンセルムスの論証について、「この主張は一般に神の本体論的証明(存在論的証明)と呼ばれ、思考から実在の世界への論理的飛躍が指摘されるが、それは論述の意図を誤解したものである。アンセルムスが求めているのは、神の存在がいかなる性質のものかへの理解であって、その存在の立証ではない」と述べている(「アンセルムス[カンタベリの]」『新カトリック大辞典』第1巻、研究社、1996年、264頁)。

このことは次のように証明される。事物においても存在することは、知性のみにおいて〔存在すること〕よりも大きいのであり、そして、もしそのものが知性においてのみ存在するのであれば、事物においてさえも存在しているいかなるものも、そのものよりも大きいことになるであろう。そして、そのようにして、すべてのものどもよりも大きなものが、或るものよりも小さなものであり、すべてのものどもよりも大きなものではなくなるであろう。そして、このことはまったく矛盾している³²⁾。(傍点筆者)

このテキストでは、第三者的な立場から、「それよりも大きなものが何も考えられえない或るもの」と、実在する他のあらゆる諸事物との比較を行っており、認識者にとって、それが事物において存在すると考えられうるのか否かという視点は見られないといってよい。

また、ガウニロは、「それより大きなものが何も考えられえない或るもの」という意味内容は、それが理解されると「すぐに」(mox) それの実在も理解されているようなものであると考えている³³⁾。もっとも、トマスが異論で用いているのは「直ちに」(statim) という語であり、また、トマスが用いた「意味表示 (する)」(significatio; significare) という語をガウニロは用いていないという点での相違はある。しかし、アンセルムス自身のテキストと比較する限りでは、トマスが『対異教徒大全』と『神学大全』の異論において挙げた論証との内容的な類似は顕著であるように思われる。

結 語

以上の考察から、われわれはトマスのアンセルムスの論証に対する理解を次のようにまとめることができる。

(1) トマスは『プロスロギオン』におけるアンセルムス自身の論証を批判しているわけではない。最初期の『命題集注解』から晩年の『詩編注

32) “et hoc ita probatur quia maius est esse et in re quam in solo intellectu, et si illud solo est intellectu, maius illo erit quidquid etiam in re fuerit, ac sic maius omnibus minus erit aliquo et non erit maius omnibus, quod utique repugnant”: *Quid ad haec respondeat quidam pro insipiente*, p. 124.

33) “Postremo quod tale sit illud ut non possit nisi mox cogitatum indubitabilis existentiae suae certo percipi intellectu”: *Quid ad haec respondeat quidam pro insipiente*, p. 126.

解』に至るまで、アンセルムスの名を挙げているテキストにおいては、トマスはアンセルムスの論証が論理的妥当性を持っていることを認めている。また、『対異教徒大全』および『神学大全』において批判されている論証は、内容的にアンセルムス自身の論証であるとは言い難く³⁴⁾、トマスもアンセルムスの名を挙げていない。

(2) もっとも、アンセルムスの論証が目指していたのは、すでに信仰によって認めている事柄を理性によって知解することであり、信仰を前提とせず、万人が認める感覚的経験から出発するトマスによる神の存在証明とは意図が異なっている。そして、トマスもこのアンセルムスの意図を理解している。

(3) トマスが批判しているのは、いかなる者でも、「それよりも大きなものが考えられえない或るもの」という名称の意味内容を理解すると、「直ちに」それが存在することが認識されるという意味での自明性（われわれのもとでの自明性）を主張する論証であるが、そのような論証はアンセルムス自身の論証よりも、ガウニロによってアンセルムスのものとして提示された論証に類似している。

(4) その批判においてトマスは、「知性においてのみ存在するもの」よりも「知性においても事物においても存在するもの」の方がより大きいものとして考えられているという論拠を否定しているわけではない。トマスはこの命題を認めたくえて、より大きいものの系列の無限進行をわれわれが考えるのか否か、逆の言い方では、「それよりも大きなものが考えられえない或るもの」が存在すると考えることができるのか否かを問題にしているように思われる。

以上のことから、アンセルムスとトマスの立場の間には、多くの論者によって主張されているように、思考・概念から実在への飛躍を認めるか否かという断絶があるのではなく、両者の洞察には共通点が多くみられると言うべきであろう。

34) ローガンは“it was not Anselm’s argument that he [Aquinas] was addressing”と述べているが、これはアンセルムスの論証に関するトマスの理解全体に対する評価であると言える。Cf. Logan, *op. cit.*, p. 143.